

両毛漁業協同組合長 中島 淳志（桐生市川内町）

【略歴】奥羽大文学部英語英文学科卒。アパレル関係の仕事の傍ら、漁協に従事。2010年、組合長に就任。釣り専門誌に執筆し、フライフィッシング講師も務める。

キャッチ & リリース

◎魚を増やし育む環境を

みなさんは「キャッチ & リリース」(C&R=再放流)という言葉聞いたことがあるだろうか。

C&Rを辞書で調べると、「釣り上げた魚を再び水に戻してあげること。結果より経過を尊重するスポーツフィッシングの象徴的行為」といった意味が記されている。しかし、実際は言葉ばかりが先行している部分もあり、目的や場面によってもさまざまな捉え方、もしくは捉えられ方がある。また、自然河川や管理釣り場(釣り堀など)といったように、釣り場の種類とそこでの規制や使用目的などによってもその意味はだいぶ変わってくる。

昨年、当組合の管轄内にてC&R区域を設置した。渡良瀬川の一定区域では釣った魚の再放流(コクチバスを除く)と、再放流するにあたって魚への負担が少ないバーブレスフック(かえしのない釣り針)を使用してもらうといった、いくつかのレギュレーションを義務づけている。

以前も述べたが、ほとんどの河川湖沼では各漁協の放流などによって魚の増殖が行われている。どんどん魚を放流し、どんどん釣ってもらうのも楽しいかもしれないが、それではいずれ底をつく。遊漁の平等を期し、魚の乱獲などを防止するために規制があるわけだが、現在ではいろいろな自然環境の弊害も多く、漁協の増殖だけでは遊漁者数に対し十分な供給ができていないのが現状である。

そのため、釣り場の有効活用としてこのような区域を設け、生息する魚の子孫を増やし育む環境をC&Rとそのレギュレーションによって確保し、河川全体に魚を増やそうという考えだ。ここでは遊漁を楽しんでもらうと同時に、多くの魚の自然再生産を一番の目的としているのである。

それなら全てC&Rにしまえばよいと言う方もおられると思うが、遊漁には幅広い層のニーズがある。釣った魚をおいしく食べたいという方や、持って帰りたいという方もいる。幼児が魚を釣って遊べる場所も残したい。遊漁のモラルとマナーに反していなければ、より多くの遊漁者のニーズに応えたい。また、一つの河川でも環境はさまざまなため、その場その場に適した管理が必要とされる。

このC&R区域は渡良瀬川高津戸ダムより下流域の管轄内で、過去5年間、年間通して魚を調査した結果、多くの生息魚がここを産卵場としていた。また、遊漁者数、釣りの種類などを記録してきた結果からも、ここが適合した。しかし、再放流しているから魚を増殖しなくてもよいということではなく、遊漁者とのバランスを考え成魚放流も行い、人工産卵床の造成、発眼卵放流、稚魚放流と力を注いでいる。そして釣りの醍醐味(だいがみ)として、よりワイルドな魚が増えたら最高ではないかという思いから、ここでのC&Rをすすめているのである。